

事例報告 - 1 『松ノ木小ノ善福寺川での地域調べ』

報告者：(有)人イエまちネットワーク 取締役 一級建築士 山田 清さん

報告

(1) 暮らしの場としての「人とイエとまち」の関係性

私は杉並の阿佐ヶ谷で建築設計の仕事をしていますが、フィールドにしている杉並でどのような考え方で活動してきたかについて自己紹介を含めてお話しします。

建築家はクライアントの依頼を受けて仕事をしますが、私は建築設計という視点だけではなく、暮らしの場としての「人とイエとまち」の関係性を捉えて、もう少し広い観点から環境を含めた取り組み方をしたいと考えていました。それで私の会社の名前も「人イエまちネットワーク」としました。

一方、1994年頃から「おぎくぼ塾」という名前で、月に一回、夜7時から9時まで、関心と時間のある方はどなたでもというスタイルで、社会人を対象にした勉強会を開いています。参加した方から500円の通信費・資料代を頂き、授業料・講師料なしでやっています。

毎回前半は「住環境」を共通のテーマに講師から話題提供をお願いし、後半はディスカッション、終了後は部活と称して飲み屋さんで議論することを続けています。

ここ数年はまちづくりに関する話題が主になってきました。この延長線から、中央線沿線を中心にした市民の方々との「まちづくり情報ネットワーク」の性格が強くなり活動の幅が広がって参りました。

そんな時、東京都教育庁が中心となって進めてきた生涯学習のありようを探る検討委員会の方から、実行プロジェクトの一つに協力して欲しいとの話がありました。それは杉並区に流れる善福寺川を題材にしたものですが詳しくは後ほどお話しします。

近年青少年を取り巻く様々な事件が多発していますが、単に家庭の躰や教育の問題で片付けられるものではなく、もっと根が深いものです。

高度に都市化したことで関係性をうまくつくれないうちところ起因しているものが多く見受けられます。それを私は「都市化の急速な進行に伴う関係障害」と呼んでいます。都市化はその速度を速めることで、役割分担や分業化、さらに関係の個別化・省略化などを通して、人々の暮らしの中にある様々なつながりに不具合を生じさせ、多くの問題を引き起こすことになりました。このような中で、関係性の修復をしていこうというのが私のまちづくりの原点です。

(2) われらプロジェクト誕生

いきなり「子供プロジェクト」とか、「われP」ってどういうことかお分かり

にならない方がいらっしゃると思いますので、まず「子どもプロジェクト」からお話します。

1997年に東京都の教育庁が中心となって生涯学習のありようが検討されていました。

その中で水の循環をテーマにした実行プログラムとして「善福寺川がつなぐ～人・水・いのち」が提案されました。それは善福寺川を再評価し、沿岸の生き物、人々の共生や都市における水の循環を念頭においたまちづくりにつなげることが主旨にうたわれておりました。その取り組みについて提案した方から相談を受けたのですが、そこで私は流域の小学校に通う子ども達に登場してもらおうとして「子どもプロジェクト」を提案しました。子どもを社会の構成員として位置付ける、つまり主体化していくことがまちづくりに欠かせないからです。そのために学校の授業の中に組み込んでもらうように考えました。

この取り組みは1999年12月に善福寺川流域にある井荻小、杉並第二小、松ノ木小、東田小の校長先生たちと、地域で様々な活動をしている人たちとの間で初めて顔合わせをして、翌年1月からそのうちの井荻小、杉並第二小、松ノ木小を対象に「君たちの知っている善福寺川を教えて」という投げかけをすることから始まりました。

川に入るための計画書づくりや観察と地域を調べることで、こどもたちが地域の様子を学ぶだけでなく、学校外の多様な人々の存在を知り、それらの役割や関係性にふれることで、人と地域のあり方を学ぶということを最大の狙いとしてしました。

しかし始めてみたら各学校での対応が異なっていた上に、入念な計画を立てることができないままの、まさに走りながら考えるような取り組みでした。

何とかやり終えたところで翌年度も引き続き取り組んで欲しいとの要望が各学校からありました。実は、子どもプロジェクトは計画立案中に事業予算がなくなってしまったという背景がありました。予算がなくなったということは事業そのものがなくなったことになるのですが、そのことで取り組みに制約がなくなり、柔軟な進め方ができることになった訳です。

しかし、継続したものにするためには、無償を前提にはできません。そこで何か予算がつく事業はないかと探していました。なかなか見つからなかったのですが2000年の6月ごろ、ようやく新たに取り組める事業の話が出てきました。これは子どもの育成を総合的な見地から考えていこうとするものです。これからは、その活動の報告です。

“「子供P」から「われP」へ”ということで、松ノ木小学校で取り組んだ事例を、映像を使ってお話します。

「われP」というのは、「われらプロジェクト」といって、正式名称を「子ども自身を知り、心と体を健やかに育む事業」と言うのですが、非常に

長ったらしいので通称「われらプロジェクト」とし、さらに省略したのが「われP」です。

社会福祉・医療事業団の子育て支援基金という助成金をいただいて、3年間取り組んでいるうちの、現在が2年目です。

これは「冒険遊び場づくり」、「地域調べ」、「引きこもり・不登校対応事業」という3つを主な柱にして、それをばらばらにではなく、相互に関連付けてやっているというのが特徴です。もうひとつの特徴は、杉並をモデルとしてやっていることです。

皆さん杉並区に関係ある方々だと思いますので善福寺川ってどういう所かわかりになるとおもいますが、あらためて映像で見ると水源の善福寺池はこんな感じになっておりまして、上流部は川の側まで市街地が迫っております。下流部のほうは公園がたくさんあって自然度が高い所なのですが、川底には色々なゴミがあり、大雨が降ると下水が混入してくるいわゆる典型的な都市河川です。

この中で子どもプロジェクトは、「井荻小学校」と「杉並第二小学校」それから「松ノ木小学校」とこの3つの小学校で取り組んだのですが、私どものパワーが限られていますので、われPでは1年目は引き続き3校を対象にしましたが、2年目は松ノ木小学校に絞って活動しました。

最初に松ノ木小学校で取り組んだのは2000年、年度で言うと1999年度ですね。その当時の5年生、今は中学1年生になっています。

どういう事を行ったかということ、まず善福寺川についてみんなどう感じているのかなってことを知りたかったので、導入は我々大人の側が何か教えるのではなくて「君たちの知っている善福寺川を教えて」という投げかけから始めました。

ただ、いきなりでは答えにくいと思って「好きなところ」「嫌いなところ」「不思議に思うところ」「秘密のところ」はなんだろうという聞き方をしました。いくつかのグループに分かれてそれぞれカードに書いてもらい、整理したものをグループごとに発表してもらいました。

続いて2回目に、先ほどの好きなところ、嫌いなところといろいろ出してもらったのですけれど、じゃ一体なんで嫌いだと思うか、好きだと思うかということワークショップ形式でやりました。この映像はその後に発表している光景です。

それで3回目ですけれど、そういうことを踏まえて「善福寺川について一番気になっていることは何か」をディスカッションしてもらい、ひとりひとりに発表してもらいました。

これで5年生が終わって6年生になったら何かやろうねと言い残して、でもな

かなか機会が得られなかったのですが、彼らが6年生になった時に、われらプロジェクトという先ほど申し上げた社会福祉・医療事業団の助成金で、再び学校と関連することができまして取り組みました。

6年生になって、5年生の体験を下地に何をしようか？ということで、下級生に対して地域調べの取り組み方のヒントになる素材を作ろうと、その為には善福寺川を観察してメモに残そうと、ただ、それだけではなくて冊子にまとめて、それぞれの自分史にしようということでやりました。

これは川を散策しているシーンで、下島先生が撮った写真です。その時感じたことをその場で、こういうような形でメモをしてもらいまして、こんな冊子ができました。

6年生が卒業する時の前日によく製本が間に合いまして、卒業記念としてひとりひとりに手渡すことができました。

同じ年度に4年生を対象に、ワークショップなんかをやりながら「川と仲良し」というテーマで川に探検に行きました。この時にはたった一回きりしか行けなかったのも、いろいろ調べようということも計画していたのですが、子供達が興奮してほとんど半分以下しか目的を達せられなかったというのが現状です。

この4年生が、今5年生になっています。今年度は新たな4年生と、それから先ほどの4年生、今は5年生になった引き続きの5年生、この2学年の取り組みをしました。

今年度は、計画論というのをちょっとテーマに盛り込んでみたいと思ってやりました。それで、まず4年生については川を調べに行くのを一回きりだともうも余りうまくいかないのも、その調べるためにどのような方法が良いかを試しにやってみる、さらにどんなことを調べたら良いかをその前に調べにみようということで合計3回行きました。

我々ができるだけ心がけたのは、このようなことでうまく行かなかったということも、取り組んだからこそ得られたものであるし、もうひとつはどうしてもうまく行かないというのは、学校の授業という制約があって、その中でやらざるを得ないのでそれは子供達が全部負うことはないだろうというようなことで、声かけをしながら4年生の取り組みをしました。それを映像で見るとこのような形でやったわけですが、保護者の方々の協力を得られて、3回目、本番前に2回やったことが生かされて、ほぼ当初の目的は達成できたのじゃないかなと思います。

5年生です。フィッシュボーンで全体をとというのは、まず僕らが子供の頃を振り返ってもきっとそうなのだろうと思うのですが、何のためにこの勉強をしているのかというのが良く分からないので余り関心が湧かない、というのは結構あるのですね。

5年生の場合には到達点をあらかじめ示しておいて、それに向けて取り組むようなことをしたならばどうだろうかという実験です。

まず、出発点があって、方向があって、目指すものの方向があって、そして到達点がある。この到達点から逆に、その前には何をしたら良いか、その何かをする為に準備はどうしたらいいかとか、或いはどういうことを勉強したら良いか、どういうことを調べたら良いかということ、ずっとこうやって行くと、魚の骨のように見えるのでフィッシュボーンって言い方をします。

これを5年生の取り組みの具体的なものに当てはめると、出発点は身近な環境があって、到達点は杉並教育フォーラムの発表の場で、杉並区長さんに勉強した成果を何かしらの提言をしようということに到達点にしました。その為の準備をどんなふうにするかということ、常に意識しながらやったというのが全体の流れです。それで実際に書いたフィッシュボーンはこんなものです。 図 -

1：フィッシュボーン

フィッシュボーン手法は計画検討の際よく使われるもので、今回これを利用した理由は、(1)他人からの評価に耳を済ませて聞き入れることは勿論のこと、自己評価も取り入れたいと考えたこと、(2)計画立案のときには様々な角度から検討するが、実行段階ではなかなかその通りに行かないことを実感してもらい、柔軟な対応を心がけるということでした。

それを映像で見ますとフィッシュボーンができて、我々地域の人間が色々こうやって、みんなで輪になって糸のボールをそれぞれこう投げ渡ししながら、自分は環境についてどう思うかということ、交換しているシーンです。これをこういうふうにするかということ、こういうことをすることによって集中して仲間の話を聞くことができるということ、それとゲームのようなものですので緊張感を和らげるということでもやりました。

こんなことを経ながら、提言書の最後の部分を作っているところで、ようやく出来上がり準備ができました。提言書を持って、もうそろそろ、この会場に5年生が到着すると思います。この後に区長さんに提言書を渡すシーンがありますので、どうぞお楽しみにして下さい。このようなことをやりながら、小学校の総合的学習の時間について、運営方法について、一つの案としてこのような提案をしています。

(3) 相互の関係性が生む相乗効果

われわれのこの取り組みを次のように発展させればと思っています。ひとつは取り組むテーマ、小学生が取り組むテーマを中学生が企画提案し、そこに定員枠を設けない。そうすれば面白いところには大勢来るだろうし、つまらないところには一人も来ないという事態が発生するので、中学生が、今時の小学生の関心の在りどころはどこかとか、今日の社会における問題は何だろう

かってきつと議論すると思うのです。

そのアイデアの掘り下げについて高校生がサポートしていく。そしてその取り組むテーマをもう少し専門的な見地から大学生がバックアップしてゆく。このようになると、すでに小学校の域からはみ出しています。

人間関係もはみだしていますし、予算面でも、いろんな手続き面でもはみ出しています。それを社会が補償してゆく。こんな事ができれば総合的な学習の時間というの、とても実のあるものになるのじゃないかなと思います。

もうひとつは、善福寺川という流域に着目すれば、いくつも学校があるわけですから、学校区を越えて共通のテーマで取り組むことができればとても素晴らしい学びの場が実現するのじゃないかなと思います。

さらに、インターネットを使って世界に発信をしてゆくというようなことが行われれば、もう世界中がつながっていきける。

たったひとつの小学校の総合的な学習の時間についても、このような取り組みをすれば、素晴らしい広がりが見られるのじゃないかなってことで、いろいろなところでこういうことしようよって私は提案しています。

こんなことをやってきたわけですけど、実は学校から頼まれたわけではなくて勝手に我々が学校にもちかけたというのが実態です。その訳は、日頃私は様々な方々とまちづくりということで、いろいろな勉強をしたり、活動をさせていただいている。けれどもまちづくりという時には、大体大人の人が多く参加するのでどうしても子どもが主体におかれることはなくて、客体として扱いをされているケースが多いのじゃないかと常日頃感じていたからです。

子どもたちが学んだり育っていく環境について、勿論学校というところがとても大切なところであるけれど、学校を中心にしながらも地域の責任として、子どもの学びの場を地域にも、そういう受け皿をつくる必要があるんじゃないかということで、その仕組みをつくって学校と連携しようとして学校に持ちかけたんです。そういった意味では、初めてのケースであったにも関わらず、このように継続したものにつなげることができたのですけれど、その場に直面していた下島先生から、一体あの時、本当は、どういうふう感じたのか、迷惑だったかも知れないしということも含めて、ちょっと、お話いただきたいと思います。

下島保光先生（区立松ノ木小学校教諭）

それでは、バトンタッチしまして、学校側としてどのような気持で対応したかを私から簡単ですがお話したいと思います。

校長先生から、こういう話があるのだけれどもと、まず、5年生どうかしらという話がありました。

山田さんがやっているこのプロジェクトですけれど、今までにない形で学校に息吹を吹き込んでくれたと、私は率直に、正直な気持ち、そう思いました、というのは、今、学校で地域の人材をどんどん活用して、それを子供達の教育活動の中に生かして行けないかと、どの学校も取り組んでいます。ところが、それは、いつも学校側から地域への発信なのですね、地域に発信して地域の人材の活用ということなのです。ただ、今回の山田さんのケースは逆なのです。外から学校に働きかけをしてくれた、そういう経験は私今まで一度も無かったものですから、すごく戸惑ったのですけれども、その時の気持ちを思い出し、なかなか、思い出せないのですが、今、思っているのは、新しい風を学校に入れてくれたなって、そういう気持ちでいます。

子供達と数回の関わりだったのですが、山田さんとプロジェクトの方々の姿勢を見まして、私自身も学ぶことがいくつもありました。

一番大きかったのは、子供達に何か教えようという気持ちでこれを計画したのじゃ無いということです。子供達から自分達も何か学ぼうと、そういう気持ちでこのプロジェクトを組んでくれたということです。それが、すごく嬉しかったです、と言うのは、一番最初の会議の席で、私が山田さんに「いったい子供達にどんなことを教えたら良いでしょうか？調べさせたら良いでしょうか？」という質問をしたら、「いや下島さん違うのです。子供達に私達は教えてもらいたいのです。」という言葉が返ってきたのです。学校の教員、授業という、何か教えなきゃいけないという、すごく頭が固いですよね。そういう意味でも、私の頭を少し柔らかくしてくれたかな、と言うことで、山田さんとの出会いは、素晴らしい出会いだったな、と思います。

そうやって、回を重ねていくうちに、子ども達というのは面白いですね、言葉じゃないのです。その雰囲気、やる気を起したり、なくしたりするのです。自分達が、先程、山田さんの話にもありましたけれども、到達の目標がありますよね、まず、そこを明確にするというのは大事なのですけれども、そこに到るまでの、子供と大人の関わり、これが子供達の意欲を高め、また、子供達の意欲を持続させる、そういう意味でも、期間があいて、たった数回の会だったのですけれども、子供達が意欲的に取り組んでくれた、というのは、あっ！！なるほど、こういう形で子供達と関わって行けば、他の学習でも、子供達は意欲を持って、取り組んでくれるのだな、それから子供達は結果をあまり重視しないということです、その過程を重視するっていう、それをこの会で私は、学ばせていただきました。

実は、この後、5年生が6年生になった時に、総合的な学習の時間というのが、松の木小学校、年間35時間の枠で取り組むことになっていたのですが、5年生のこの経験が、6年生の総合的な学習の時間にすごく生きました。それはまた後で時間がありましたら発表したいと思います。以上です。

山田 清さん

下打ち合わせしたわけでは無いのに、大変褒めていただいて、とっても嬉しいなと思っておりますけれど、これは決して私だけがやったわけではなくて、この会場にも実際一緒にやって下さった方がみえていますが、杉並の地域で、様々な地域活動をしている人達の力を合わせて出来た事です。

もうひとつは、これは本音というか、正直なところを言いますと、総合的な学習の時間ってというのは結果を求めなくて良いというのがありましてね、とりあえず“すごい”って褒めとけば良いのでね、そういう意味では松ノ木小学校での取り組みはやり易かったと言うことです。

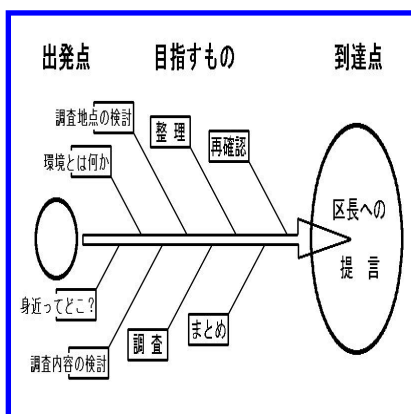
ファシリテーター：渋谷 英雄さん（東京メンタルヘルス・アカデミー）
有難う御座いました。今、お話を聞いていまして、一番インパクトを持っているのは、川の写真が柵で囲まれていて、川が完全に閉じられているのだな、ということを感じたことと、それから、はみ出すという、すごい言葉がキーワードだななどと思いながらお話を聞いていました。
後で、子供が何を期待したのかとか、外から投げかけた山田さんが何を期待してたのか、それも、ちょっと掘り下げてお尋ねしたいなと思いました。

有難う御座いました。時間の都合もありますので、次は天沼中学校の生重さんから事例報告をお願い致します。

* クリックすると、大きい画像を表示します。

『[図 - 1 フィッシュボーン](#)』

[* クリックすると、大きい画像を表示します。](#)



『[図 - 1 フィッシュボーン](#)』